

安全データシート

改訂日:2022年8月23日

<p>1. 製品及び会社情報</p> <p>化学品の名称 推奨用途 会社名 住所 電話番号</p> <p>整理番号</p>	<p>ジクロロメタン 試験研究用 米山薬品工業株式会社 大阪市中央区道修町2丁目3番11号 (06)6231-3555(大阪・本社) (03)3246-2311(東京) (0268)22-5910(上田) (052)504-2221(名古屋) (082)537-0290(広島) CB0621</p>
<p>2. 危険有害性の要約</p> <p>GHS分類 健康に対する有害性</p> <p>環境に対する有害性</p> <p>ラベル要素 絵表示又はシンボル</p> <p>注意喚起語 危険有害性情報</p> <p>注意書き</p>	<p>急性毒性(吸入:蒸気):区分4 皮膚腐食性及び皮膚刺激性:区分2 眼に対する重篤な損傷性又は眼刺激性:区分2A 発がん性:区分1A 生殖毒性:区分2 特定標的臓器毒性(単回ばく露):区分1(中枢神経系、呼吸器) 区分3(麻酔作用) 特定標的臓器毒性(反復ばく露):区分1(中枢神経系、肝臓、生殖器(男性))</p> <p>水生環境有害性 短期(急性):区分3 水生環境有害性 長期(慢性):区分3</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p>危険 吸入すると有害 皮膚刺激 強い眼刺激 発がんのおそれ 生殖能又は胎児への悪影響のおそれの疑い 中枢神経系、呼吸器の障害 眠気又はめまいのおそれ 長期にわたる、又は反復暴露による中枢神経系、肝臓、生殖器(男性)の障害 水生生物に有害 長期継続的影響によって水生生物に有害</p> <p>【安全対策】 すべての安全注意を読み理解するまで取り扱わないこと。 この製品を使用する時に、飲食又は喫煙をしないこと。 個人用保護具や換気装置を使用し、ばく露を避けること。 保護手袋、保護眼鏡、保護面を着用すること。 屋外又は換気の良い区域でのみ使用すること。 ミスト、蒸気、スプレーを吸入しないこと。 取扱い後はよく手を洗うこと。 環境への放出を避けること。</p> <p>【応急措置】 吸入した場合: 空気の新鮮な場所に移動し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。 眼に入った場合: 水で数分間、注意深く洗うこと。コンタクトレンズを容易に外せる場合には外して洗うこと。 皮膚に付着した場合: 多量の水と石鹸で洗うこと。 汚染された保護衣を再使用する場合には洗濯すること。 ばく露又はその懸念がある場合: 医師の診断、手当てを受けること。 飲み込んだ場合: 気分が悪い時は、医師の診断、手当てを受けること。口をすすぐこと。 眼の刺激が持続する場合は、医師の診断、手当てを受けること。 気分が悪い時は、医師の診断、手当てを受けること。 皮膚刺激があれば、医師の診断、手当てを受けること。</p> <p>【保管】 容器を密閉して涼しく換気の良い場所で施錠して保管すること。</p> <p>【廃棄】 内容物、容器を国又は都道府県の規則に従って廃棄すること。</p>
<p>3. 組成、成分情報</p> <p>化学物質・混合物の区別 化学名 別名 化学式 化学物質を特定できる一般的な番号 含有量</p>	<p>化学物質 ジクロロメタン 塩化メチレン、メチレンクロライド、二塩化メチレン(労安法) CH₂Cl₂ CAS RN: 75-09-2 99%以上</p>

官報公示整理番号(化審法、安衛法) その他	(2)-36 / 公表 HSコード: 2903.12
4. 応急措置	
吸入した場合	被災者を新鮮な空気のある場所に移動し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。 気分が悪い時は、医師に連絡すること。
皮膚に付着した場合	皮膚を速やかに洗浄すること。 多量の水と石鹼で洗うこと。 医師に連絡すること。
眼に入った場合	汚染された衣類を脱ぎ、再使用する前に洗濯すること。 水で数分間注意深く洗うこと。次に、コンタクトレンズを着用していて容易に外せる場合は外すこと。その後も洗浄を続けること。 眼の刺激が続く場合は、医師の診断、手当てを受けること。
飲み込んだ場合	口をすすぐこと。 直ちに医師に連絡すること。
予測できる急性症状及び遅発性症状の最も重要な兆候症状 応急処置をするものの保護	眼、皮膚に対する接触で発赤、痛み、薬傷、吸入により、めまい、し眠、頭痛、吐き気、脱力感、意識喪失 火気に注意する。現場では保護マスク等を着用し、ガスを吸入しないようにする。
5. 火災時の措置	
適切な消火剤	小火災: 粉末消火剤、二酸化炭素、散水 大火災: 粉末消火剤、二酸化炭素、耐アルコール性泡消火剤、散水 棒状注水
使ってはならない消火剤 特有の危険有害性	酸素との混合気中では燃焼性 強く加熱するとき、特に裸火と接触するとき分解しその際、有毒なホスゲンおよび塩化水素ガスが生じる。
特有の消火方法	危険でなければ火災区域から容器を移動する。 移動不可能な場合、容器及び周囲に散水して冷却する。
消火を行う者の保護	消火後も、大量の水を用いて十分に容器を冷却する。 消火作業の際は、適切な空気呼吸器、化学用保護衣を着用する。
6. 漏出時の措置	
人体に対する注意事項、保護具及び緊急時措置	漏洩物に触れたり、その中を歩いたりしない。 直ちに、全ての方向に適切な距離を漏洩区域として隔離する。 関係者以外の立入りを禁止する。 作業者は適切な保護具を着用し、眼、皮膚への接触やガスの吸入を避ける。 漏洩しても火災が発生していない場合、密閉性の高い、不浸透性の保護衣を着用する。 風上に留まる。 低地から離れる。 密閉された場所に入る前に換気する。
環境に対する注意事項	河川等に排出され、環境へ影響を起こさないように注意する。 環境中に放出してはならない。
封じ込め及び浄化の方法及び機材	少量の場合、乾燥土、砂や不燃材料で吸収し、あるいは覆って密閉できる空容器に回収する。 少量の場合、吸収したものを集めるとき、清潔な帯電防止工具を用いる。 大量の場合、盛土で囲って流出を防止し、安全な場所に導いて回収する。 大量の場合、散水は、蒸気濃度を低下させる。しかし、密閉された場所では燃焼を抑えることが出来ないおそれがある。 危険でなければ漏れを止める。 漏出物を取扱うとき用いる全ての設備は接地する。 蒸気抑制泡は蒸発濃度を低下させるために用いる。 すべての発火源を速やかに取除く(近傍での喫煙、火花や火炎の禁止)。 排水溝、下水溝、地下室あるいは閉鎖場所への流入を防ぐ。
7. 取扱い及び保管上の注意	
取扱い	
技術的対策(局所排気、全体換気等)	「8. ばく露防止及び保護措置」に記載の設備対策を行い、保護具を着用する。
安全取扱注意事項	「8. ばく露防止及び保護措置」に記載の局所排気・全体換気を行なう。 周辺での高温物、スパーク、火気の使用を禁止する。 容器を転倒させ、落下させ、衝撃を加え、又は引きずるなどの取扱いをしてはならない。 すべての安全注意を読み理解するまで取扱わないこと。 屋外又は換気の良い区域でのみ使用すること。 この製品を使用する時に、飲食又は喫煙をしないこと。 接触、吸入又は飲み込まないこと。 眼、皮膚との接触を避けること。 眼に入れないこと。 ヒュームを吸入しないこと。 ミストを吸入しないこと。 蒸気を吸入しないこと。 スプレーを吸入しないこと。 取扱い後はよく手を洗うこと。
接触回避	『10. 安定性及び反応性』を参照。

衛生対策	取扱い後はよく手を洗うこと。
保管	
安全な保管条件	保管場所は壁、柱、床を耐火構造とし、かつ、はりを不燃材料で作るこ 保管場所は屋根を不燃材料で作るとともに、金属板その他の軽量な不燃 材料でふき、かつ天井を設けないこと。 保管場所の床は、床面に水が浸入し、又は浸透しない構造とすること。 保管場所の床は、危険物が浸透しない構造とするとともに、適切な傾斜 をつけ、かつ、適切なためますを設けること。 保管場所には危険物を貯蔵し、又は取り扱うために必要な採光、照明及 び換気の設備を設ける。 国連輸送法規で規定されている容器を使用する。
容器包装材料	
8. 暴露防止及び保護措置	
許容濃度	
管理濃度	50ppm
日本産業衛生学会	50ppm, 170mg/m ³
ACGIH	TLV-TWA 50ppm
設備対策	防爆の電気・換気・照明機器を使用すること。 静電気放電に対する予防措置を講ずること。 この物質を貯蔵ないし取扱う作業場には洗眼器と安全シャワーを設置す ること。 空気中の濃度をばく露限度以下に保つために排気用の換気を行なうこ と。 高熱工程でミストが発生するときは、空気汚染物質を管理濃度以下に保 つために換気装置を設置する。
保護具	
呼吸器の保護具	適切な呼吸器保護具を着用すること。
手の保護具	適切な保護手袋を着用すること。
眼の保護具	保護眼鏡(普通眼鏡型、側板付き普通眼鏡型、ゴーグル型)
皮膚及び身体の保護具	適切な顔面用の保護具を着用すること。 適切な保護衣及び長靴を着用すること。
9. 物理的及び化学的性質	
物理状態	液体
色	無色
臭い	特異臭
融点/凝固点	-95.1°C(融点/凝固点)
沸点又は初留点及び沸点範囲	40°C(沸点又は初留点及び沸点範囲)
燃焼性	該当しない。
爆発下限界及び爆発上限界/可燃限界	下限 12vol%、上限 25vol%
引火点	なし。少量の引火性物質の添加又は空気中の酸素濃度の上昇により、 燃焼性
自然発火温度	556°C
分解温度	該当情報なし。
pH	中性
動粘性率(粘度)	0.43mPa・s(20°C), 0.393mPa・s(30°C)(粘性率)
溶解度	1.3g/100mL(20°C)
n-オクタノール/水分配係数	log Pow = 1.25(測定値)
蒸気圧	47.4kPa(20°C)
密度及び/又は相対密度	1.3255(20°C/4°C)
相対ガス密度	2.93(計算値)
蒸発速度(酢酸ブチル=1)	該当情報なし。
10. 安定性及び反応性	
反応性、化学的安定性	熱と湿気に不安定である。 加熱や燃焼により分解し、有毒ガス(塩化ビニル、塩化水素、ホスゲン、 一酸化炭素)を生成する。
危険有害反応可能性	強酸化剤、強塩基、アルミニウム粉末、マグネシウム粉末、ナトリウム、カ ルシウムなどの金属等と激しく反応し、火災や爆発を引き起こすおそれ がある。
避けるべき条件	高温へのばく露強酸化剤、強塩基、アルカリ金属、金属粉末との接触
混触危険物質	強酸化剤、強塩基、アルカリ金属、金属粉末との接触
危険有害な分解生成物	塩化水素、ホスゲン等の有害ガス
11. 有害性情報	
急性毒性	経口：ラットのLD ₅₀ 値として、2,280 mg/kg(雄)、1,410 mg/kg(雌)、2,120 mg/kg (雄)、1,530~2,524 mg/kg、1,710~2,250 mg/kg(EHC 164(1996)、NITE 初期リスク評価書(2005))の5件の報告があり、1件が区分4、2件が区分 外(国連分類基準の区分5)、2件が区分4~区分外(国連分類基準の区 分5)に該当する。件数の多い区分を採用し、区分外(国連分類基準の区 分5)とした。旧分類が使用したCERIハザードデータ集のデータはList 3 の情報源であり、環境省リスク評価第2巻(2003)のデータは出典がList 3の情報源であるRTECSであるため不採用とした。新たな情報源の使用 により、旧分類から区分を変更した。 経皮：データ不足のため分類できない。 吸入：ラットの6時間吸入ばく露試験のLC ₅₀ 値として15,000 ppm(雄)(4時間換算 (蒸気)値: 18,371 ppm)(EHC 164(1996)、NITE初期リスク評価書(2005))との報 告に基づき、区分4とした。なお、ばく露濃度が飽和蒸気圧濃度(574,109 ppm(25°C))の90%よりも低いため、ミストがほとんど混在しないものとし てppmを単位とする基準値を適用した。旧分類から区分を変更した。

皮膚腐食性及び皮膚刺激性	ウサギを用いた皮膚刺激試験において、強度又は中等度の皮膚刺激性を示す複数の試験結果 (DFGOT vol. 1 (2016) (Access on May 2017)、NITE初期リスク評価書 (2005)) から、区分2とした。
眼に対する重篤な損傷性又は眼刺激性	ウサギを用いた眼刺激性試験で本物質を適用後1時間以内に軽度から中等度の炎症が生じ、流涙は1週間続き、結膜・瞬膜・瞼の縁の充血は適用2週間後まで続いたとの報告や、ウサギを用いた別の眼刺激性試験で中等度の刺激性を示し一次刺激性指数は33 (最大値: 110) との報告 (いずれもDFGOT vol. 1 (2016) (Access on May 2017)) から、区分2Aとした。
呼吸器感作性又は皮膚感作性	<p>呼吸器: データ不足のため分類できない。なお、ヒトにおいて呼吸器感作性において陽性を示す知見はないとの記載 (DFGOT vol. 1 (2016) (Access on May 2017)) や、本物質がヒトにおいて感作性物質であるとの指摘はないとの記載 (SIAP (2011)) があるが、詳細が不明である。よって、分類できないとした。</p> <p>皮膚: マウスを用いたLLNA試験で、アセトン/オリーブオイル (4:1) に本物質を5%、25%、100%含む溶液25 μLをマウスの耳に適用したところ、刺激指数 (SI) はそれぞれ1.3、1.5、1.7であり、本物質は皮膚感作性を示さなかったとの報告 (DFGOT vol. 1 (2016) (Access on May 2017)) がある。ヒトにおいて、本物質が皮膚感作性物質であることを示す知見はないとの記載 (DFGOT vol. 1 (2016) (Access on May 2017))、SIAP (2011)) があるが詳細が不明である。よって、分類できないとした。</p>
生殖細胞変異原性	<p>ガイダンスの改訂により区分外が選択できなくなったため、分類できないとした。すなわち、in vivoでは、マウスの優性致死試験で陰性、マウスの赤血球を用いたPig-aアッセイ、トランスジェニックマウスの肝臓を用いた遺伝子突然変異試験で陰性、マウスの骨髄細胞を用いた小核試験で陰性、末梢血を用いた小核試験で弱い陽性、マウスの骨髄細胞を用いた染色体異常試験で陰性、末梢血、肺細胞を用いた染色体異常試験で弱い陽性、ラットの骨髄を用いた染色体異常試験で陰性、マウスの骨髄細胞を用いた姉妹染色分体交換試験で陰性、マウスの肺細胞を用いた姉妹染色分体交換試験で陽性、ラット、マウスの肝臓、肺を用いたDNA損傷試験で陽性、陰性の結果、ラット、マウスの肝臓を用いた不定期DNA合成試験で陰性である (NITE初期リスク評価書 (2005)、ATSDR (2000)、IARC 110 (2016)、ACGIH (7th, 2015)、IRIS Tox. Review (2011)、環境省リスク評価第3巻 (2004))。In vivo小核試験、染色体異常試験での弱い陽性結果は、本物質のグルタチオントランスフェラーゼによる種特異的な高い代謝率によるものと考えられており、本物質には遺伝毒性がないと評価されている (SIAP (2011))。In vitroでは、細菌の復帰突然変異試験で陽性、哺乳類培養細胞の遺伝子突然変異試験、マウスリンフォーマ試験で陽性、陰性の結果、小核試験で陰性、染色体異常試験で陽性、陰性の結果、姉妹染色分体交換試験で陰性である (NITE初期リスク評価書 (2005)、IARC 110 (2016)、IRIS Tox. Review (2011)、環境省リスク評価第3巻 (2004)、PATTY (6th, 2012)、ACGIH (7th, 2015))。</p>
発がん性	<p>ヒトでは本物質へのばく露と胆道がん及び非ホジキンリンパ腫との間に正の相関がみられ、IARCは本物質の発がん性に関してヒトでは限定的な証拠があると結論した (IARC 110 (2016))。また、先に日本産業衛生学会は本邦で本物質と1,2-ジクロロプロパンとの混合ばく露により、胆道がん発症が強く疑われる症例報告があることを報告し、動物試験結果 (後述) を併せて本物質の発がん性分類を第2群A1に分類した (産衛学会許容濃度の提案理由書 (2015))。実験動物では、マウスを用いた複数の発がん性試験において経口又は吸入経路により肝臓、吸入経路により肺などに腫瘍発生頻度の増加が認められ、ラットを用いた複数の発がん性試験において吸入経路により皮膚と乳腺などに腫瘍発生頻度の増加が認められており、IARCは実験動物では発がん性の十分な証拠があると結論した (IARC 100 (2016)、産衛学会許容濃度の提案理由書 (2015))。既存分類ではIARCがグループ2A1に (IARC 110 (2016))、NTPがRIに (NTP RoC (14th, 2016))、EPAがLに (IRIS (2011))、ACGIHがA3に (ACGIH (7th, 2015))、日本産業衛生学会が第2群A1に (許容濃度の勧告 (2017): 2015年提案) それぞれ分類している。さらに本物質に関して、厚生労働省は労働基準法施行規則に基づき、「本物質にさらされる業務による胆道がん」を平成25年 (2013) に労災補償の対象となる別表第1の2 (職業病リスト) に加えた (厚生労働省ホームページ (Access on November 2017))。以上より、本項は区分1Aとした。なお、旧分類 (区分2) 以降の追加情報により、分類区分を変更した。</p>

生殖毒性

ヒトでの生殖影響に関しては、以下の報告がある。すなわち、本物質のばく露を受け（ばく露濃度は不明であったが、本物質の入ったバケツに手を浸け、部品にかけて拭き取る作業に従事）、中枢神経機能障害で通院していた34人の労働者のうち8人（年齢20～47歳、ばく露期間0.4～2.9年）が精巣、精巣上体、前立腺の痛みを訴え、不妊状態にあった。このうち、精液採取に協力した4人では明らかに精子数、運動精子数が少なく、精子奇形率も高かった（環境省リスク評価第3巻（2004）、NITE初期リスク評価書（2005）、産衛学会許容濃度の提案理由書（1999）、ATSDR（2000））。その後、NIOSHが環境測定を行って結果、本物質の平均ばく露濃度は68 ppm（3.3～154.4 ppm）で、労働者は許容濃度以下のスチレン（平均濃度：7.2 ppm（1.5～10.4 ppm））にもばく露されていた（ATSDR（2000））。一方、上記報告よりも2倍高い濃度の本物質に3か月以上ばく露された労働者4人では、精子の減少はみられなかったとの報告があり、ATSDRは両報告結果の差異はばく露期間によるもの（ばく露期間が長くなると影響が出る）か、前者の報告が本物質以外に他の物質にも同時ばく露された結果によるのかは明らかでないとした（ATSDR（2000））。しかし、本物質は経皮吸収があるとされており（産衛学会許容濃度の提案理由書（2005）、SIAP（2011））、本物質の入ったバケツに手を入れた労働者の事例では吸入経路に加えて経皮経路を介した吸収による影響の関与があり、気中濃度が半分でも十分な量が吸収され、生殖影響が生じた可能性も考えられる。実験動物では、ラットを用いた吸入経路による2世代試験で、1,500 ppm（5,300 mg/m³）の高用量までばく露されたが、F0、F1親動物、F1、F2児動物のいずれにも有害影響はみられなかった（NITE初期リスク評価書（2005）、SIAP（2011）、DFGOT vol. 1（2016）（Access on May 2017））。経口経路での生殖能に関しては、ラットに交配前13週間飲水投与（125 mg/L）した結果、雌の受胎率、産児数への影響はなかったとの報告（NITE初期リスク評価書（2005））、ラットに交配前10日間強制経口投与（25～225 mg/kg/day）した結果、最高用量の225 mg/kg/day まで受胎率に影響はなかったとの報告がある（DFGOT vol. 1（2016）（Access on May 2017））。一方、妊娠ラット、又は妊娠マウスの器官形成期に1,250 ppm（4,400 mg/m³）を吸入ばく露した発生毒性試験では、ラット、マウスともばく露群で母動物に一酸化炭素ヘモグロビン（CO-Hb）の増加と肝臓重量の増加がみられたが、胎児には軽微な影響（腎盂拡張、骨化遅延（ラット）、過剰胸骨（マウス））のみみられた（NITE初期リスク評価書（2005）、DFGOT vol. 1（2016）（Access on May 2017）、ACGIH（7th, 2015））。また、妊娠ラットの妊娠期間を通して、最大4.0%で混餌投与した試験では、4.0%で母動物に体重増加抑制、胎児に体重低値のみみられたのみであった（NITE初期リスク評価書（2005）、環境省リスク評価第3巻（2004））。以上、ヒトでは本物質への職業ばく露による男性労働者を対象とした不妊の調査研究があり、8人が不妊状態で、うち4人で精子減少が示されたとする報告があるのに対し、より高濃度でばく露された4人の労働者では精子減少はみられなかったとの報告がある。ただし、本物質は経皮吸収されるため、バケツに手をいれた労働者では吸入経路だけでなく、経皮経路による吸収が加わり、気中濃度に関わらず生殖影響を生じた可能性が考えられる。一方、動物試験結果からは本物質は吸入、経口のいずれの経路でも生殖発生影響を示す証拠は得られなかった。以上より、本物質職業ばく露による男性生殖能への有害影響が報告されたが、ヒトの生殖影響は1報告のみで限定的と考えられること、動物試験からは生殖発生影響は検出されなかったことを踏まえ、本項は区分2とした。

特定標的臓器毒性(単回暴露)

ヒトでは本物質を主成分とするペンキ剥離剤の使用中の事故による急性吸入ばく露例として、換気不良の場所でペンキ剥離作業を行なった男性が、救急室搬入時、頭痛、胸部痛を訴え、見当識障害、進行性の警戒性の喪失を起し、疲労感と無気力状態の亢進、記憶喪失、時間感覚の喪失を示したとの報告がある（NITE初期リスク評価書（2005））。また、同様の事故によるばく露で、中枢神経の抑制、嗜眠、眼と呼吸器の炎症、肺の浮腫がみられ、死に到る場合もあるとの記述がある（NITE初期リスク評価書（2005））。さらに換気不十分な環境で作業をしていた植物成分抽出釜の作業員4名が、中枢神経抑制、麻酔、眼の刺激、気管と肺の浮腫を示して死亡したとの報告がある（NITE初期リスク評価書（2005））。ボランティアによる急性吸入ばく露実験では、200 ppm、1.5～3 時間のばく露で神経行動学的影響（警戒心の混乱、複合警戒追跡行動の障害）がみられたとの報告、300 ppm、95分のばく露で、視覚機能検査で検出された臨界融合頻度の低下がみられたとの報告がある（NITE初期リスク評価書（2005））。実験動物では、ラットの単回吸入ばく露試験で、中枢神経抑制、体温低下、血圧低下、痙攣、感覚麻痺、呼吸困難、体性感覚誘発の変化がみられたとの報告、マウスの単回吸入ばく露試験で、中枢神経の抑制による回復性の昏睡がみられたとの報告がある（NITE初期リスク評価書（2005）、EHC 164（1996））。実験動物に対する影響は、区分2に相当するガイダンス値の範囲で認められた。以上より区分1（中枢神経系、呼吸器）、区分3（麻酔作用）とした。

特定標的臓器毒性(反復暴露)	<p>ヒトについては、幻聴・幻覚を伴う中枢神経の不可逆的損傷がみられたとの症例報告、側頭葉両側の変性がみられたとの症例報告、精神錯乱、てんかん発作の症例報告がある。胆嚢の病変や肝臓の腫大がみられたとの報告がある(NITE初期リスク評価書(2005)、EHC 164(1996))。また、ばく露濃度は不明であったが、本物質の入ったバケツに手を浸け、部品にかけて拭き取る作業に従事していた労働者8人(年齢20~47才、ばく露期間0.4~2.9年)が精巣、精巣上体、前立腺の痛みを訴え、不妊状態にあった。このうち、精液採取に協力した4人では明らかに精子数、運動精子数が少なく、精子奇形率も高かったとの報告がある(NITE初期リスク評価書(2005)、環境省リスク評価第3巻(2004)、産衛学会許容濃度の提案理由書(1999))。</p> <p>実験動物については、ラットを用いた2年間飲水投与毒性試験において、区分2のガイダンス値の範囲内である雄の52 mg/kg/day以上の群、雌の58 mg/kg/day以上の群で肝臓の変異細胞巣・脂肪変性がみられている(環境省リスク評価第3巻(2004))。マウスを用いた1か月間連続吸入毒性試験(24時間/日、7日/週)で区分2のガイダンス値の範囲(蒸気)の75 ppm(90日換算: 0.35 mg/L)以上で肝臓に脂肪の蓄積、肝臓重量の増加、血中ブチリルコリンエステラーゼ量の上昇、マウス及びラットを用いた100日間連続吸入毒性試験(24時間/日、7日/週)で区分2のガイダンス値の範囲(蒸気)の25 ppm(ガイダンス値換算: 0.35 mg/L)以上で肝細胞脂肪染色陽性、軽度肝細胞空胞化がみられている(NITE初期リスク評価書(2005))。</p> <p>以上より区分1(中枢神経系、肝臓、生殖器(男性))とした。</p> <p>なお、ヒトの男性生殖器への影響を追加したため旧分類と分類が異なった。</p>
誤えん有害性	<p>データ不足のため分類できない。なお、HSDB (Access on May 2017) に記載された数値データ(粘性率: 0.437 mPa・s (20°C)、密度(比重): 1.3255)より、動粘性率は0.33 mm²/sec (20°C)と算出される。</p>
12. 環境影響情報 生態毒性	<p>短期: 甲殻類(オオミジンコ)48時間LC₅₀ = 27 mg/L (Canada PSAR:1993、OECD (急性) SIDS:2011)であることから、区分3とした。</p> <p>長期: 慢性毒性データを用いた場合、急速分解性がなく(難分解性、BODIによる平均分解度: 13% (化審法DB:1986))、魚類(ファッドヘッドミノ)の32日間NOEC(体重) = 82.5 mg/L (NITE初期リスク評価書:2007)であることから、区分外となる。</p> <p>慢性毒性データが得られていない栄養段階に対して急性毒性データを用いた場合、急速分解性がなく(難分解性、BODIによる平均分解度: 13% (化審法DB:1986))、甲殻類(オオミジンコ)48時間LC₅₀ = 27 mg/L (Canada PSAR:1993、OECD SIDS:2011)であることから、区分3となる。</p> <p>以上の結果から、区分3とした。</p>
残留性・分解性 生体蓄積性 土壌中の移動性 オゾン層への有害性	<p>難分解性 低濃縮性 該当情報なし 当該物質はモントリオール議定書の附属書に列記されていない。</p>
13. 廃棄上の注意 残余廃棄物	<p>廃棄においては、関連法規並びに地方自治体の基準に従うこと。 都道府県知事などの許可を受けた産業廃棄物処理業者、もしくは地方公共団体がその処理を行っている場合にはそこに委託して処理する。 廃棄物の処理を依頼する場合、処理業者等に危険性、有害性を十分告知の上処理を委託する。</p>
汚染容器及び包装	<p>容器は清浄にしてリサイクルするか、関連法規並びに地方自治体の基準に従って適切な処分を行う。 空容器を廃棄する場合は、内容物を完全に除去すること。</p>
14. 輸送上の注意 国連番号 品名(国連輸送名) 国連分類 容器等級 輸送又は輸送手段に関する特別の安全対策	<p>1593 ジクロロメタン 6.1 III 食品や飼料と一緒に輸送してはならない。 輸送に際しては、直射日光を避け、容器の破損、腐食、漏れのないように積み込み、荷崩れの防止を確実に進行。 重量物を上積みしない。</p>
国内規制がある場合の規制情報 陸上輸送 海上輸送 航空輸送 応急措置指針番号	<p>消防法の規定に従う。 船舶安全法の規定に従う。 航空法の規定に従う。 160</p>
15. 適用法令 化審法 化学物質管理促進法(PRTR法) 毒物及び劇物取締法 消防法 労働安全衛生法	<p>優先評価化学物質 第1種指定化学物質 毒物及び劇物に該当しない。 危険物に該当しない。 名称等を表示し、又は通知すべき危険物及び有害物(第57条及び施行令18条、第57条の2及び施行令18条の2)[ジクロロメタン(別名二塩化メチレン)] 危険性又は有害性を調査すべき物[ジクロロメタン(別名二塩化メチレン) 特定化学物質第2類物質 特定化学物質特別管理物質</p>

労働基準法
海洋汚染防止法
土壌汚染防止法
水質汚濁防止法
大気汚染防止法
船舶安全法
航空法

作業環境評価基準
健康障害防止指針公表物質
変異原性が認められた既存化学物質
疾病化学物質
有害である物質(Y類)
第1種特定有害物質
有害物質
有害大気汚染物質
毒物類・毒物
毒物類・毒物

16. その他の情報

参考文献

NITE-CHRIP(製品評価技術基盤機構HP)
16615の化学商品(化学工業日報社)
職場のあんぜんサイト(厚労省HP)
NITE-GHS分類結果(製品評価技術基盤機構HP)

記載内容のうち、含有量、物理／化学的性質等の数値は保証値ではありません。危険・有害性の評価は、現時点で入手できる資料・情報 データ等に基づいて作成しておりますが、すべての資料を網羅した訳ではありませんので取り扱いには十分注意して下さい。